

## “アフリカのいまを知ろう”

【講師】 山田肖子氏（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）

【日時・場所】 2009年1月24日（土）13:00～15:00  
名古屋大学大学院 国際開発研究科 1階 プレゼンテーションルーム

- 【概要】
1. ニュースで見る現代アフリカ
  2. 統計に見るサブサハラ・アフリカ
  3. アフリカの民族、政治、紛争
  4. アフリカの社会、文化、暮らし
  5. 日本とアフリカの関係
  6. 日本とアフリカの歴史的関係
  7. アフリカと私たちの暮らしとの関わり
  8. 終わりに
- ◆質疑応答

### 1. ニュースで見る現代アフリカ

アフリカ大陸には53の国がある。チュニジア、モロッコ、アルジェリア、リビア、エジプト等の北アフリカの国々は経済発展においては中進国のレベルにあり、貧困や色々な社会問題、社会開発の遅れがしばしば指摘されるのは、北アフリカの国々を除いた47のサブサハラ・アフリカ（サハラ砂漠より南のアフリカの国）の国々が多い。

#### ■ジンバブエ

ジンバブエのインフレのニュースをご覧になった方もいらっしゃると思う。数十%程度でもかなりのインフレだが、ジンバブエの場合は現在の段階で220万%のインフレ率と言われている。

その原因は、現大統領ムガベ氏の次のような政策による。

- ・近隣の国（コンゴの内戦等）への軍隊の派遣。
- ・国内において、白人の農場主（南アフリカには植民地時代から白人の入植者が多く、白人の農場主が沢山いる。）が持っている農場を取り上げ、黒人に渡すという政策を取り入れた。しかし結局、白人が渡した農場を政府の役人が私物化してしまい、農業自体が破綻してしまった上に、一般の黒人の生産者には全く利権が配当されなかった。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

上記のようなことから財政危機に陥り、財政的負担が大量に生まれたことや、農業生産に壊滅的な打撃が生まれたことで、それを対処療法的に補うために、貨幣を乱造してしまった。その結果、お札の価値が急激に下がってしまうという状況が生まれ、失業率も 80%という状況になっている。

## ■ケニア大統領選挙（2007 年 12 月）後の騒乱

ジンバブエでも、2008 年の大統領選挙の正当性についての問題が指摘されたが、ケニアにおいても、大統領選挙（2007 年 12 月）の後に民族紛争が起きている。ケニアでは、現職の大統領キバキ氏の出身部族であるキクユ族と、その対立候補オディンガ氏の属するルオ族との部族間対立となった。

アフリカでは、選挙における政党の対立は、民族の対立と同一視されてしまう傾向が強い。支配政党が、ある特定の民族の利益を代表する傾向が強い。また、選挙の結果を操作されたために支配政党が勝ったのであり、本当は得票数からすれば対立政党が勝ったのではないかという不信感が原因となり、選挙の後の騒乱が生まれるということがよくある。

## ■ダルフル（スーダン）紛争

スーダンのダルフル紛争は、イスラム教の人たちと、非イスラム教の人たちの争いと言われることが多いが、実際にはその背景に、石油や水資源等の資源に対する争いもある。

アフリカの民族紛争は、選挙における政党間の対立が民族対立の一つのあらわれとなっていると言われるが、資源に対する利権争いがその背景になっているケースが多い。

## ■その他

以上の他にも、飢餓、貧困や、エイズの問題をニュースで見ることが多い。

## 2. 統計に見るサブサハラ・アフリカ

統計によるとサブサハラ・アフリカは、国内総生産（GDP）や一人当たり国民総所得が、中・低所得国の平均から比べてもかなり低い。こうした経済的な指標のみならず、保健指標である出生時平均余命はサブサハラ・アフリカ平均では 50 歳だが、エイズの影響が非常に強いため、南部・東部アフリカでは、30 代が平均余命という国もある。また、人口増加率が非常に高いのも特徴である。社会指標では、初等教育の就学率も他の地域より低いのが、統計から見たところのサブサハラ・アフリカの状況である。

## ■HIV/AIDS

南部・東部アフリカでは特に感染者の割合が高い。アフリカのエイズの一つの特徴として、女

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

性と子どもの感染が非常に多いことが挙げられる。特定の行動パターンがエイズをもたらしているというよりは、母子感染が多く、これは女性がエイズに感染する原因として非常に多い。

感染者は、病院等に隔離されず、普通のコミュニティで暮らしているため、差別に晒されやすく、社会的に非常に脆弱なグループになりやすい。母親が感染して亡くなったケースも多く、親がいないエイズの孤児というのは、親がいないだけでも大変なのに、親がエイズで亡くなったということでも社会的な差別を受けるので、そういう子たちが学校に行く機会を奪われてしまったり、親戚に引き取られても苦勞するというような問題がある。

また、働き盛りの大人もどんどん亡くなっていく。学校の先生や公務員が、より良い仕事ができるようなトレーニングを行っても、亡くなってしまうと、その人たちのスキルが全く蓄積されない。こうした問題は、国の発展にとっても非常に大きな損害となる。

## ■付加価値生産

技術、生産においては、世界の地域間のギャップがどんどん広がっていると言われている。

資源に依存した経済には、たとえば石油を掘ってすぐ輸出するような、技術的な加工をしない資源依存型の経済と、簡単な加工だけを行う低技術の輸出経済、更には、中等高等の技術を使った生産品を作る経済がある。ある程度の経済発展を遂げて工業化が進んでくると、より中・高等技術というのが中心の輸出構造になってくる。

ILO 統計によると、1985 年から 1998 年にかけて、中・高等技術分野のシェアは、東アジアにおいて 10%以上伸びている。他方、サブサハラ・アフリカやラテンアメリカは、マイナス成長であり、グローバル経済のなかでより低技術分野にシフトしてしまっている。このことは、高く売れる技術がなく簡単な加工技術しか持たないために、国際市場のメカニズムの影響を受けやすいという問題も抱えている。

## ■セクター別労働人口構成

サブサハラ・アフリカでは 6 割以上の人々が農業を行い、8.7%の人が製造業に従事している。ほとんどの人が農業で生活をしているわけだが、非常に環境が厳しく、気候の変動も激しいため、農業生産は安定していない。よって、アフリカの経済が安定するには、まず農業生産を安定させることが重要だとよく言われる。

### 3. アフリカの民族、政治、紛争

アフリカでは、なぜいつも紛争の話ばかりが出てくるのだろうか。

## ■多様性と国家の成り立ち

一つには、アフリカというのは非常に多様な社会であるということを知っていただきたい。

# Millennium Promise Japan

## ミレニアム・プロミス・ジャパン

アフリカの言語分布地図を参照すると、国境の線と言語分布地図の線とは全く別であることに気付く。なぜこのように国が成り立っているのだろうか。

ヨーロッパが植民地支配をしていた頃、ベルリン会議（アフリカ分割会議）において、ドイツ・フランス・ベルギー・イギリス等がアフリカ大陸の分け方を決めた。その結果、同じ言語や文化を共有している民族の人たちが複数の国にまたがってしまったり、あるいは一つの国の中に全く言語や文化が異なる人が住むこととなった。

エチオピアには、約 150 の異なるエスニック・グループがいると言われている。それだけ多様な文化グループ・言語グループが一つの国にいる状況では、誰の言語・誰の文化が一番支配的な文化であるかという、非常にセンシティブな問題が発生することはご想像いただけるのではないだろうか。日本は単一民族だと長いこと言われてきた。そう言っていること自体が、多様性を無理矢理ごまかしてきた側面はあるかもしれないが、それはある意味、日本国籍を持つ人の中で、皆が日本語を使い、皆が漢字とひらがなとカタカナで文字を書き、日本の文化を自分の文化と考えるという共通の合意が、社会のどこかにあると思う。しかし、アフリカの社会では、そうした合意を作ることが大変だと言われている。あまりにも多様なバックグラウンドの人がいすぎることが、一つの根本的な原因としてある。

### ■「国民」と「民族」

上記に加え、「国民」というものと「民族」というものが、一つの地図の中に重なっていないことも紛争が絶えない原因の一つである。言語分布と国境が重なっていない状況においては、資源に対する利権を巡る対立が、民族の対立という形にすり替えられやすい。

民族の対立という名のもとに争いが起き、それが政治対立の形をとるわけだが、それは元をただと、こうした多様性であったり、資源に対する支配の争いであったりする。

### ■家産制国家

政治学の世界でいう「家産制国家」とは家族の中で資源を分配するような生活、社会の在り方を示す。家族の中で、父親なり、力のある者が狩りをして物を獲ってきたら、それを皆で食べるという家産制の社会。これが国のレベルにまで発展してしまったというのが家産制国家である。国家の権力を持った人が、自分の家族や自分の民族にその権力を分配してしまうのである。民族を代表して政権を取ったら、民族に対して政権を取ったことの便益を分配してあげなければいけないという社会構造になっていると、公共の福祉や、国民全員に利益を分配するのは、違う論理が働いてしまう。上述したように、国民と民族が合致していないため、民族のためにやることは国民のためにやることとは限らない。すると、支配的民族に属している人は良いが、そうでない国民は損をしてしまい、国を覆すしかないという話になりやすいのである。

### ■税基盤の脆弱性

国家がうまく機能するための一つの条件として、税収がある。税金を国民から集めるというの

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

は意外に難しいことである。たとえば日本では、豊臣秀吉が刀狩りを行い、誰も反乱しないようにしたが、それと同時に、誰がどの土地を耕していてどれだけの収入があるかというのを全部調べた。これだけの広さの田んぼを持っている人だから、これだけの税金を納めなさい、という制度を作ったわけである。これを行うということは、国家に相当の組織的調査能力や、実行力がなければならない。

アフリカにはまず、定住していない人がある程度いるため、ここはあなたの土地だからここから上がってきた収穫は税金として納めなさいということの言いにくいという状況もあるし、税収も少ない。その結果、国家として、やらなくてはいけないことをやるために、援助に依存するという構造ができやすい。アフリカの国というのは、何か国がやろうとすればするほど援助が必要になるという実態もある。

## 4. アフリカの社会、文化、暮らし

アフリカのことを研究している人たちの中には、社会や文化や暮らしなどに興味をもっている人たちもいる。

アフリカの社会は、都市だけでも、農村だけでもなく、定住せずに移動しながら狩猟採集している人たちがいる。狩猟採集民がいる社会というのは、ヨーロッパや日本などが考えるような、定住することを前提とした「国家」とは、相いれない難しい部分をたくさん抱えており、こういう人たち独自の文化が沢山ある。

音楽においては、伝統的な楽器を使った音楽もあれば、アフリカン・ポップス等の都市で作られる新しい文化もある。色々な衣装や装飾品、文学もある。

なお、名古屋大学には、文学研究科に、カメルーンのことを人類学的に研究している和崎春日先生や、宗教研究をしている嶋田義仁先生、人類学の佐々木重洋先生、環境学研究科の星野光雄先生等、アフリカ研究をしている先生がいらっしゃる。

### ■アフリカの宗教

#### ・イスラム教

イスラム教は、アラビア半島側の地域から、紅海をはさんで、サハラ砂漠沿いに東西に広がっている。これは、ラクダに乗ってキャラバンで商人が旅をして広めたため、イスラム教は商人の宗教なのである。同時に、アラビア半島から船で南にも渡っている。そのため、東アフリカの地域には古くからイスラムの都市国家があった。

東アフリカで広く使われているスワヒリ語も、その源はアラビア商人と商売をするための言葉である。スワヒリ語を話す人たちというのは色々なエスニック・グループにまたがっており、商

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

売をしていた人たちが、商売用の共通語として発展させたのが東アフリカのスワヒリ語だと言われている。

## ・キリスト教

コロンブスが新大陸を発見した前後の時期は、ヨーロッパでは大航海時代と呼ばれているが、ヨーロッパが大航海をしていたということは、訪問された地域もあったということである。その一つがアフリカであり、港から海に沿ってキリスト教が広まった。

なお、コートジボワールやガーナなどの西アフリカは、奴隷貿易の拠点になったところである。白人は海沿いの縁の所までしか来ないため、内陸から奴隷を捕まえてきて運んでくるアフリカの人たちがいた。今でもガーナの奴隷貿易の拠点となった砦には、アメリカの黒人の観光客が非常に多く、自分たちのルーツとして訪ねてくる。

(なお、アレックス・ヘイリーというアメリカの黒人の作家は、アメリカに一番最初に来た人まで先祖を辿っており、それが「ルーツ」という小説になっている。)

## 5. 日本とアフリカの関係

### ■貿易

#### ・輸入

日本とアフリカの関係において、貿易では、アフリカからの資源輸入が圧倒的に多い。

最近、レアメタルの需要が非常に増えており、そのためにアフリカのレアメタルの需要が急激に拡大した。また、中東の政情が不安定であるため、石油や資源輸入を中東だけに頼っているのは心配だということで、アフリカに対する依存が強まっている。地域別輸入額の推移では、少しずつアフリカ（主に南アフリカ）からの輸入が増加しており、非鉄金属や鉄鋼が多いことがわかる。

#### ・輸出

南アフリカには、ヨーロッパ市場に向けて輸出する自動車や機械製品のアセンブリー（組み立て）工場がある。他には、アフリカ市場向けの工業製品を輸出しているが、アフリカ市場向けの安い製品というのは、現在は中国、インドが非常に多く輸出しており、やはり日本製品は高く、アフリカ市場において価格競争では中国、インドにとってもかなわない。中国、インドの製品は、アフリカ国内で作ったものよりも安いために、最近ではアフリカの国内産業までもが中国製品（特に繊維や加工食品等）による打撃を受けてしまっていると言われる。

### ■援助

アフリカ向け ODA が、ここ 5 年で非常に増えてきている。2005 年にイギリスのグレンイーグル



# Millennium Promise Japan

## ミレニアム・プロミス・ジャパン

スでサミットがあり、アフリカに対する援助の増大について国際的に議論が行われた。この時に日本もアフリカ向けの ODA を倍増すると宣言したが、なかなか実態が伴わず、欧米諸国から批判をだいぶ受けていた。2008 年にまた福田元首相が再度、2012 年までにアフリカ向け援助を倍増するという宣言をしているため、アフリカ向けの日本からの二国間 ODA というのは、ODA 全体に占める割合が 2002 年には 8.7 パーセントだったのが、2006 年には 35 パーセントまで伸びている。日本の援助がアジア中心であるというのはずっと変わらないパターンであるが、アフリカの外交上の重要性というのも非常に高まっているといえる。

### ■ TICAD

2008 年 5 月、第 4 回 TICAD (Tokyo International Conference on African Development (アフリカ開発会議)) が横浜で開催された。この TICAD は、1993 年から 5 年に 1 回開催され、日本がアフリカに対する援助というのを中心になってリードしていこうということで、アフリカの各国の首脳などを招いて毎回行っているものである。アフリカに関わっている人たちにとって、2008 年はビッグイベントであり、色々なメディアにもアフリカの話がでて、皆にもっとアフリカを理解してもらいたいと考えた年であった。なお、福田元首相がアフリカに対する援助倍増を宣言したのは、2008 年の第 4 回 TICAD においてである。

## 6. 日本とアフリカの歴史的関係

### ■ 織田信長に献上されたアフリカ人

日本で最初にアフリカのことを記録に残っているのは、織田信長の時代である。この時代、日本は出島にポルトガル商人が来ており、ポルトガル商人がアフリカ人（おそらくエチオピアのあたりのアフリカ人だといわれる）を連れてきた。織田信長は新しいもの好きであったので、このアフリカから連れてきた人を召使いとして献上したということである。どのくらい歴史的に信憑性のある話かは不明だが、本能寺で織田信長が亡くなる時に、一番身近にいて一緒に亡くなった人の中にアフリカ人がいたと言われている。

### ■ 環インド洋交易

東アフリカの海岸には、日本からの貿易船がかなり古い時代から行っていたのではないかとされている。考古学的な調査では、東アフリカの方を掘ると、日本の伊万里焼の破片等が出てくるという話がある。

### ■ 船乗りや旅行者の往来、定住者

19 世紀・20 世紀には日本の定期客船が就航しており、船乗りや、旅行者が行ったり来たりすることがよくあった。また、そういう人たちが通るために定住している人たちもおり、からゆき

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

さんという女性の定住者や小売商人などもいたと言われている。

日露戦争の時には、バルチック艦隊というロシアの艦隊がアフリカの一番南端を回って北上していくのを目撃して報告したと言われている日本人がいる。東アフリカのマダガスカルという島国でホテル業をしていた人物で、その報告により、日本は早く情報を得られ、日露戦争で機先を制することが出来たとも言われている。

## ■エチオピア皇帝の近親者と華族令嬢との縁談

1930年代に、日本でエチオピア熱が非常に高まったことがあり、エチオピア皇帝の親戚と、日本の黒田家という華族の令嬢の縁談があった。結局破談となったが、なぜ当時これほどエチオピア熱が高かったか。他のほとんどのアフリカ諸国が植民地支配された中で、エチオピアは、ほんの数か月だけイタリアに支配された以外は、唯一、帝国を守ったからである。帝国のプライドを守った有色人種の誇りだということで、アジアの有色人種のリーダー日本とアフリカのリーダーがぜひ手を結ぼうということでエチオピア熱が高かった時期があった。しかし、第二次世界大戦への動きが高まっていく中で、日本がエチオピアと組んで孤立するのは得策ではないということから、次第にエチオピア熱は冷めていったというふうに言われている。

## ■野口英世の黄熱病研究

野口英世は、アメリカのロックフェラー研究所の研究者であり、そこから派遣されたガーナで、黄熱病の研究をして亡くなった。今でもガーナのガーナ大学に行くと、野口英世研究所という日本が援助を続けている研究所がある。

## ■アパルトヘイト下南アフリカでの「名誉白人」

アパルトヘイトで、欧米諸国が南アフリカに対する貿易を絶っていた時代にも、日本は南アフリカとの交易を続けていたため、黄色人種だが白人のように名誉をもって扱うという意味で、日本人は「名誉白人」と南アフリカでは言われていた。

## 7. アフリカと私たちの暮らしとの関わり

アフリカの人たちは、今の日本では以下の通り、かなり身近な存在になっている。

- ・アフリカの国がサッカーが強いということはニュースでたくさん見ると思うが、アフリカの人にはサッカーがとても好きで、サッカーの話をすると非常に盛り上がる。
- ・日本のチョコレートに使っているカカオの70%はガーナから来ている。私はよくガーナに行くとチョコレートを買ってくることもあるが、ガーナのチョコレートと、日本で売っているチョコレートとはだいぶ様相が違う。一つの難しい国際的な貿易構造の問題があり、アフリカでカカオに加工をすると、輸出時の費用がとても高くかかってしまい、原料そのまま輸出したほ



# Millennium Promise Japan

## ミレニアム・プロミス・ジャパン

うが短期的には収入が上がるような構造が作られている。マイルドでおいしいチョコレートを作る技術はヨーロッパの技術として独占されており、アフリカがそれをやろうとしても収益が上がりにくい構造ができてしまっているのである。

- ・外国人労働者や移民としてアフリカから来る人が増えており、六本木にナイジェリア人がとても多い。

### 8. 終わりに

2008年のTICADにおいては、アフリカの貧困には多くの援助が必要であり、どんどん援助をしていこうという議論がされた。しかし、アフリカという社会を知らないでアフリカのために活動をするのはとても危険ではないかと考える。アフリカというのは、実に色々な文化や生活様式を持ち、異なる価値観の人たちがおり、たとえ貧困という状況は同じでも、その原因や対策というのは異なるのである。経済状況のみならず、考え方や生活に対する姿勢等色々なものが関わってくるなかで、同一の手法をどの国、どの社会にも持っていくということは非常に危険なことなのである。しかし、日本ではアフリカの社会というのを知らないで援助を行っているのではないかと思うことがある。

サッカーでも、チョコレートでも、コーヒーでもよいので、何か自分の身近なところからもう少しアフリカに興味を持つことができれば、足元からの国際交流・国際貢献ということが考えられる。ごく自然な形でそういうことが行われるよいと考えている。

### 9. 参考図書の紹介

- ・「アフリカ―苦悩する大陸」ロバート・ゲスト、東洋経済新報社。
- ・「アフリカ・レポート」松本仁一、岩波新書。
- ・「ハンドブック 現代アフリカ」岡倉登志（編著）、明石書店。
- ・「アフリカのいまを知ろう」山田肖子（編著）、岩波ジュニア新書。

#### 【質疑応答】

Q1（鈴木理事長より）ミレニアム・プロミス・ジャパンは、ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトを支援しており、昨年11月にもそれに関するセミナーを東京大学で行ったが、その中で批判的意見も幾つか交わされた。その辺りについて、先生のご意見をうかがいたい。

ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトとは、開発経済の第一人者といわれるジェフリー・サックス氏（国連事務総長顧問、コロンビア大学地球研究所長）が中心となり、UNDP（国連開発計画）と地球研究所とミレニアム・プロミスの支援により、ミレニアム開発目標達成のために行っているプロジェクトである。なぜ、ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトがサブサハラ・アフリカを選んだのかというと、世界中の貧困がサブサハラ・アフリカ以南のアフリカにかなり集中してい

## Millennium Promise Japan

### ミレニアム・プロミス・ジャパン

るためである。プロジェクトを行っている 10 か国 80 村は、農耕地帯や気候の環境等を見て区分けをした結果決められており、この村で成功すればこの地域全体で農業等が成功できるというようなモデル村となっている。ルワンダやマラウィやタンザニアの大統領等は、それを国レベルに拡大したいとおっしゃっている。しかし、批判的意見においては、アフリカの中で 80 村といっても針を落としたような地域に過ぎず、そこで成功させても意味がないのではないかというのである。

イギリスのシンクタンクである ODI は、100 ページにわたる調査研究レポートを出しており、このプロジェクトが非常に成功しているが、人が足りないということを述べている。現地には、UNDP が募集した Ph. D. を持つ人を派遣しているが、なるべく現地の人を派遣するため、人手が足りないのである。また、資金も不足しており、これも批判的意見の一部である。

それでも、モデル村を通して、アフリカの人たちもやればできるのだということを見せられれば、あとは極端に言えば資金の問題となるため、このプロジェクトは非常に意義があることだと思っているが、先生のご意見はいかがか。

A1 ミレニアム・ビレッジというのは、本当に素晴らしい活動だと思っている。ジェフリー・サックス氏は経済学者としてとても素晴らしい方なのだと思うが、サックス氏は、ミレニアム開発目標を達成するためには、最初に非常に多額の資金援助をしなければならないのだとおっしゃっており、それについては色々な批判があるのをご存知だと思う。やはり、アフリカの社会を見ると、援助漬けということに、非常に問題が多いと感じている。政府のキャパシティを越えた、その人々の今持っている資源でできるようなことを越えたほどのビッグプッシュというものが、どのくらい根付くのかという点には心配がある。しかし、モデルを作って、それを人々が学ぶということは、非常に大きな波及効果が期待できる。アフリカ研究をしている人の中で時々言われるのが、アフリカの人たちのモデルの解釈の仕方が、私たちとはだいぶ異なるということである。たとえば、農作物の収量が大きく上がれば生活が安定して良いだろうと私たち外の人間は思うが、アフリカの人たちというのは、一つの作物に依存して他のものを作らなくなってしまうと、干ばつが来た時に、作物がすべて根絶やしになって生き延びることができなくなってしまう。モデルとして非常に良い技術を伝えられたとしても、それを丸ごと生活の中に取り入れるということは、論理的にアフリカの人たちにとってはあまり意味のないことになる可能性がある。そのような場合に、一つの生産形態や一つの技術ではなく、どうすれば全体として自分たちが生きていくのにちょうど良いのかということがアフリカの人たちの中で腑に落ちれば、モデルというのは自然と広まると思う。たとえば、エチオピアの産業集積地には、色々な人や工場がどんどん集まっており、その中で技術革新が起こると一斉に広まる。良いものがあれば、一斉に広まるのである。ただし、広まる論理というのが、私たちの思っているのと違う場合があるので、やはりその社会を見て、その人たちの論理にあったモデルというのをどのように考えていけるのかが重要である。よって、ミレニアム・ビレッジに関しても、アイデアとしては、たくさん可能性があるのですが、後は向こうの論理をどれだけくみ取れるのかだと思っている。

(鈴木理事長より) おっしゃる通りで、援助の期限を 5 年としているのは、期限を永久にすると

# Millennium Promise Japan

## ミレニアム・プロミス・ジャパン

援助漬けになってしまうためである。5年過ぎたら徐々に援助を減らし、人々に自立してほしいと思っている。

また、現場には、UNDP から Ph. D. をもった人が行き、その下に7~8人の専門家がおり、更にその下にコミュニティのチームリーダーがいて、現場の意見を吸収することに非常によく努力している。

私が実際に見てきた点からお話すると、収穫については、アフリカの人々には沢山の収量があったとしても、それを市場で売るトラックがなく、それを保管する倉庫もなかった。そこで、地元の植物を使った防虫剤のようなもので倉庫を作っている。収穫は1年間で2~3倍には増えており、農家と契約して、増えた収穫の10%は学校給食になっている。ケニアの学校では、その給食のおかげで子どもが学校に来るようになり、成績が大幅に上がったという実績もある。以上の実績から、今後も支援を続けていきたいと考えている。

**Q2** さきほどサッカーのお話があったが、2010年には南アフリカでワールドカップが開催される。日本の外国人選手は、南米等からが多く、最近アフリカ人の選手というのは全く見受けられないがヨーロッパのチームにアフリカの選手がたくさんいる。日本に少ないのはなぜか。

**A2** アフリカの人たちは、ヨーロッパリーグをよく見ており、子どもたちもヨーロッパの選手のウェアを着ているなど、知名度が高いことが理由の一つではないか。

なお、移民に関していえば、親戚を頼っていくという傾向が強い。六本木にナイジェリアの人が多く、特定の場所に特定の国の人、あるいは特定のエスニック・グループの人が多いは、身内を頼っていくからである。そういう意味では、日本にアフリカの人が来ているのは、身内を頼ってくるルートができてからだと思う。

(鈴木理事長より) ちなみに、サッカーボールには非常に効果があり、サッカーボールをあげることによって子どもたちがサッカーを楽しむので、不良が少なくなり、マリファナ等を吸わずに健康になるという効果がある。

**Q3** アフリカにおいて、貧富の差というのはどのくらい深刻なものなのか。また、他の先進国のように、貧しい家の出であっても、勉強さえ頑張れば、先進国の学費の高い大学に通う奨学金が得られたり、チャンスが与えられる可能性があるのか。もしくは、一部のエリートの家の出身者だけがそのようなことが可能なのか。

**A3** 貧富の差と教育とは非常に関係が深い。アフリカではまず、学校に行って頑張る前の段階がある。日本の就学率は100%だが、アフリカでは就学率が60~70%という国も少なくない。アフリカには定住していない人がおり、定住していたとしても学校が近くになく場合もある。学校に行きたくても行けない、あるいは行っても、家の手伝いをするために学校を辞めざるをえないこともある。また、家に帰って色々やらなければならないのであれば、勉強に集中できないこともある。よって、学校での勉強を頑張れば社会でもっと上の方に行けるか否かという以前に、まずはこういった条件をすべてクリアしなければならないのである。では、それをクリアして学校に通

## Millennium Promise Japan

### ミレニアム・プロミス・ジャパン

えた場合に、親が必ずしもお金を出さなくても留学等ができるのかということ、大学まで行ければ、そうした道は比較的ある。(ただし、大学に行く時点で、すでに貧しい家でも親の教育レベルが低い家でもないというのが大半である。)奨学金は政府や欧米から出ているものがある。アフリカの国の政府も、自国が発展するためには学歴の高い優秀な人材がいなければならないという認識が非常に強いので、留学させようという政府の意思はとても強いと思う。しかし、そこに至るまでの段階で大多数の人は学校という場から消えてしまっているというのが実態である。

**Q4** 日本の援助スタイルでよく「顔の見える援助」ということが言われるが、それは本当に必要なのか。また、アフリカは日本をどのようにとらえているのだろうか。アフリカの人は日本のイメージを持っていないのではないか。

**A4** 援助が ODA の場合、つまり政府が出している場合には、それは税金から上がってきた収入ということである。これは、日本国内のことに使うお金であり、こうしたお金の一部を ODA として使っているわけだから、日本の国益に貢献しなければならないという外交的な配慮がある。よって、顔の見える援助の必要性を訴える人の多くは外務省や外交関係の人である。他方、NGO や研究者等の現場の人たちは、顔が見えるということよりも、現場のニーズに応えることが重要だと言うことが多いように思う。ここで議論されているポイントは、援助は日本の国益のためのものか否かということに関わってくると思う。これはこれまでずっと議論されているものである。

アフリカの人が日本をどのくらい知っているかという質問については、あまり知らない人が多いと言わざるを得ないのではないか。政府の援助の窓口をやっている人たちが、チャイニーズとコリアンとジャパニーズを間違えたら大きな問題だが、末端の村レベルや町で普通に会う人たちがこれらの区別がつかないというのは、日本人も相手のことをそこまでわかっていないという意味では仕方のない部分もあるのではないだろうか。

**Q5** アフリカへの援助が、根本的な問題解決とならず、一方的な支援であった場合、どのような障害や問題が起きるのか、その具体的な例などを教えていただきたい。

**A5** これは、根源的な問題であり、常に自分に問いながら仕事をしていかねばならないことである。たとえば、村に対して何か援助をするときに、誰が村の代表として出てくるかということが比較的大きい。仮に、英語を話せるために外の人との会話がうまくできる人が出てきたとしても、村の社会構造の中では影響力がなく、むしろ煙たがられているような人かもしれない。日本社会も同じだが、町内会にも婦人部や少年部等の年齢ごとの活動があり、意思決定をするやり方には色々なパターンがあると思う。外から入っていく人がそのパターンを理解する時間をかけずに、お金やものを、たとえばその影響力のない代表者に渡してしまうと、問題が起きるのではないか。また、現地の人にしてみれば、生きていくためには色々な作物が作れたほうが良いという場所において、集約的な技術革新的なプロジェクトをしても、論理にあわなければ意味がない。どちらについても、向こうの論理やメカニズムに乗ることができるかどうかという点が重要である。

## Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

Q6 ドナーではなくパートナーとしてやっていくために、これからあるべき援助とはどのようなものか。

A6 これも根源的な問題であり、私もいつも悩むところだが、そもそも援助というのは、外から提供するという手法において、相手の中から自発的に出てくるものをどれほど応援できるのかという点に限界があると感じることもある。仕事として援助を行っている、その中にある種の政治力学のようなものが生じたりすることもあるため、必ずしも援助のやり方についてクリアな回答を述べることはできない。

援助というのはやはり非常に難しいものである。さきほどの日本の国益の話もあったが、個人的関係においても、本当に何も期待せずに人にもものをあげ続けるということが、どれだけあるのだろうか。自分の満たされるものが何かしらあるために、何かをしてあげるという関係の中で、援助を通してこちらが得るものと、援助されている人たちが得るものとのバランスをどこでとっていくかというのは非常に微妙な分野だと思う。むしろ、それを問う気持ちをずっと持っていてもらいたい。

以上